

夜坐 (藤田東湖)

金風颯颯釀群陰 玉露溥溥滴萬林  
濁坐三更天地靜 一輪明月照丹心

金風 颯颯 群陰を 釀し

解説 　ま夜中秋風の中に独坐し、明月に比して自己の潔白誠忠の情を述べたもの。

玉露 溥溥 万林に 滴る

語釈 　※金風Ⅱ秋風に同じ。※颯颯Ⅱ風の吹く音。※釀群陰Ⅱ多くの暗いかげをつくりだす。※玉露溥溥Ⅱ玉のような白露をいっぱい置いてある。※三更Ⅱまよなか。※丹心Ⅱ赤心。真心。

独坐 三更 天地 静かなり

通釈 　秋風の風の吹く音が通り過ぎると、そのたびに昼のように明るい地上に黒い葉影が重なりゆれ、玉をもあざむくような白露がぼたぼたと、あたり一面の木立から滴り落ちる。独り坐していると、夜はいよいよ更け、益々静かである。ただ月のみが、一点の曇りもないこの真心を照らし、慰めてくれる。

一輪の 明月 丹心を 照らす